

阪神港 ■コンパス導入本格化

ヤード情報 運転者と共有

専用端末貸出し アプリで状況確認

ICT（情報通信技術）を活用した海上コンテナの搬出入予約システム「CONPAS（コンパス）」の阪神港への導入に向けた動きが本格化し、専用の携帯端末を用いることでドライバーにも情報共有が可能な仕組みを先行して開発して



運転者もヤード情報が分かる体制を目指している（近畿地整局提供、一部画像処理）

いる。3月に神戸港で行われた初めての試験運用では、一連の動作確認に成功。夏ごろに、より商流に近い形で実施できるよう協力事業者を募集中で、2021年度中には大阪港でも実施できるような準備を進めている。

が使用できる専用の携帯端末を貸出し、運転者もヤード情報が分かる体制を目指している。ゲート時間枠の登録が完了すると、ターミナル場所や予約番号、通関処理が完了しているかなどをスマートフォン（スマ



ホ)で確認できる。

阪神国際港湾（外園賢治社長、神戸市中央区）の小倉一仁事業開発部長は「実際に運ぶドライバーにも予約状況を知ってもらい、現場の動きに合わせられる必要がある」という意見が多か

った。年々スマホの普及が拡大していることも背景にある。うまく活用すれば無線や紙でのやり取りを削減でき、乗務員の負担軽減につながるかと考えている」と期待を寄せる。

携帯端末使用で危惧される「ながら運転」には、二つの対策を検討。コンパスのアプリ以外は使用不可にし、スマホを固定できる器具もセットで配布する予定だという。

また、携帯端末のGPS（全球測位システム）機能を活用し、トレーラの位置を可視化。車両誘導がスムーズに行える。その他、車両番号の固定も検討。現在はターミナルに来るたびに新しい番号を発行しているが、コンパスを使っているトレーラには一年中同じ番号を付与し、クレーン操縦

者などが覚えやすくすることで、作業速度の向上を図る。現在はダッシュボードに番号の書かれたプラカードを置いて提示する方式だが、更に視認性を高めるため、車体に固定された番号を貼る構想も練っている。

3月に神戸港PC18コンテナターミナルで実施した試験運用では、出入管理情報システムとの連携、事前予約枠の登録、PSカード受け付けからドライバーの専用携帯端末への行先表示といったシステムフローが正常に機能したことを確認。今後は実際の営業コンテナで実験できるよう準備を進めている。大阪港での試験は、コンパスとTOS（ターミナルオペレーションシステム）などのシステム連携が完了次第、始める予定だ。